

巻頭言

「東日本大震災復旧・復興に関与して学んだシビル NPO 活動の限界」

NCP 常務理事 有岡正樹 (NPO 法人「スリム Japan」理事長)



社会基盤ライフサイクルマネジメント研究会 (「スリム Japan」) という NPO 法人をと動き出したのが今から 6 年余前で、丁度その頃、土木学会「成熟したシビルエンジニア活性化検討小委員会」が立ち上げられ、それに参加して、建設系 NPO 法人 (シビル NPO) 活動の実態と今後の在り方の調査・研究分科会に関わったのである。私的には「スリム Japan」、公的には「シビル NPO」を両輪とした、まさに「NPO 二輪馬車」である。どちらも 2 期 4 年ぐらいで成果を取りまとめ「一丁上がり」、あとは後進に引き継いで古希をと思っていたのだが、その 2 期目に入ってから半ば、2011 年 3 月 11 日「東日本大震災」に見舞われることになる。

想像もできないような津波のものすごさを目の当たりにし、我々「スリム Japan」技術集団としては、あの膨大な津波「がれき」と「汚泥」を、その分別と移動を最小限としたいわば「地産地消」的な再利用 (Re-use) 手段を検討した。「3.11 Green Hill」構想である。その成果物が将来も十分な役割を果たし、かつその処理方法により大幅に節減される時間と財源を少しでも多く復興 (Re-construction) に役立てる、そんな 非常時の大英断としての施策を期待して、提案したのである。「スリム Japan」設立のキーワードである「Re-エンジニアリング」を含め、これまでもいろいろの機会に紹介してきているので説明は略するが、そうした構想を公表し、現地を十数回も訪れてその都度、国・県・市町村の関係者とも話したが、多くが「総論理解・各論無視」の域を出なかった。

その中身はともかく、単に NPO 法人の提言・提案である。「各論無視」の現実をイヤトというほど身につつまされて行く。同じ思いを持つ仲間が連携・協働して議論し、より大きな集団の創意として、また土木学会のような中立的な組織のバックアップも得ながら世にその施策を問うことが必要であるとの思いが募っていった。そして建設系 NPO 中間支援組織の必要性を学会理事会に提言して 2 年余、その議論を深化させこうして去る 4 月の「シビル NPO 連携プラットフォーム (CNCP)」の設立に至ったのである。

そんな震災から 3 年余、CNCP も動き出したことでもあり、6 月末から 3 日間久しぶりに岩手、宮城両県の被災地を訪れた。3 年前毎月のように調査に訪れた際、どこもかしこも同じ地獄絵に見えたそれぞれの地域が、復旧・復興との視点で大きな格差を見せるようになってきている。そんな折日本 NPO 学会に関わり出し、「Social Capital」すなわち「社会資本」という土木技術者にとって馴染みの深い英語に、「社会関係資本」(人間関係) と訳される社会学的学術用語の用途があり、NPO を含むサードセクター活動に極めて重要なキーワードであることを知った。もう訪れることはないかとも思いつつ、東京都市大学大守隆教授が後者のソーシャル・キャピタルに関して著の中で触れておられた吉田松陰の、「かくすればかくなると知りながらややむにやまれぬ大和魂」という一句が、何回も脳裏をかすめるのであった。



陸前高田市の地盤嵩上げ現場 (支柱の奥に人工松が見える)